

ベースと目的連関を考慮したOD表の推計

○ 交通都市計画コンサルタント 島内三郎
 京都大学工学部 飯田恭敬
 " 追本有一
 " 岩本康夫
 " 竹本恒行

1. 人のODはあるひとつの都市では、そのトリップ目的に依存してい。そしてトリップ目的はその人の描くトリップサイクルの各回毎に遷移するのが普通であり、そのオートリップ目的の目的生成数はサイクルのベース(住居、勤務先、駅、ホテルなど)にいる人の駆種年令性別などによってきます。「ベース別目的別パーソントリップOD表」はベース毎に描かれる各人のサイクルの中で、同じ目的をもったトリップのみを全市全人全日について集めたものであり、都市の交通計画の基本になるものである。

2. ベースにいる人の駆種別目的別オートリップの発生原単位をえておけば、そのゾーン別将来値

A_i^a : i ゾーンから発生するオートリップの目的が a であるトリップ数。

A_i^b : " " " "

などと知ることができる。これを a, b, c 3目的を例としてベクトル表示する。(n: ゾーン個数)

$$A^a = (A_1^a, A_2^a, \dots, A_n^a), \quad A^b = (A_1^b, A_2^b, \dots, A_n^b), \quad A^c = (A_1^c, A_2^c, \dots, A_n^c)$$

次々マトリックス表示を定義しておこう。

$$A = \begin{pmatrix} A^a \\ A^b \\ A^c \end{pmatrix} \text{ その形 } \begin{pmatrix} \text{---} & \text{---} & \text{---} \end{pmatrix}_{m \times 3\text{列}} \quad \bar{A} = (A^a, A^b, A^c) \text{ その形 } \begin{pmatrix} \text{---} & \text{---} & \text{---} \end{pmatrix}_{3 \times 1\text{行}}$$

3. 目的連関 ある目的をもったトリップから次の目的をもったトリップへ移行する確率を、たとえば γ_{ab} などと書くと、それは次のような吸收マルコフ行列を作る。(漢字のまはベース)

$$Q = \begin{pmatrix} I & 0 & 0 & 0 \\ \gamma_{aa} & \gamma_{ab} & \gamma_{ac} & 0 \\ \gamma_{ba} & \gamma_{bb} & \gamma_{bc} & 0 \\ \gamma_{ca} & 0 & \gamma_{cb} & \gamma_{cc} \end{pmatrix}_{4 \times 4\text{行}} \quad \text{このQから} \quad Y = \begin{pmatrix} \gamma_{aa} & \gamma_{ab} & \gamma_{ac} \\ \gamma_{ba} & \gamma_{bb} & \gamma_{bc} \\ \gamma_{ca} & \gamma_{cb} & \gamma_{cc} \end{pmatrix}_{3 \times 3\text{行}}; \quad R = \begin{pmatrix} \gamma_{aa} \\ \gamma_{bb} \\ \gamma_{cc} \end{pmatrix}_{3 \times 1\text{行}} \quad \text{と取出しておく。}$$

目的連関行列

発生部分ベクトル

更にYから \bar{Y} として次のように拡大した行列を定義しておこう。

$$\bar{Y} = \begin{pmatrix} \gamma_{aa} & \gamma_{ab} & \gamma_{ac} & 0 \\ \gamma_{ba} & \gamma_{bb} & \gamma_{bc} & 0 \\ \gamma_{ca} & \gamma_{cb} & \gamma_{cc} & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}_{3 \times 4\text{行}}$$

$$\bar{R} = \begin{pmatrix} \gamma_{aa} \\ \gamma_{bb} \\ \gamma_{cc} \\ 1 \end{pmatrix}_{4 \times 1\text{行}}$$

$$\bar{P} = \begin{pmatrix} P^a \\ \vdots \\ P^b \\ \vdots \\ P^c \end{pmatrix}$$

4. 遷移行列 いま目的別のOD遷移行列 P^a, P^b, P^c が与えられたと仮定しよう。行列 \bar{P} を定義する。

1トリップした後の着エンドベクトルは

$$\bar{A}P$$

2トリップ " "

$$\bar{A}P(\bar{Y}P)$$

$n \rightarrow \infty$ としてその合計は

n トリップ " "

$$\bar{A}P(\bar{Y}P)^{n-1}$$

$$\bar{A}P(I - \bar{Y}P)^{-1} = \bar{V} \quad \dots \dots (1)$$

一方発トリップエンドベクトルは上と同様にして、その合計は

$$\bar{A} + \bar{A}P(I - \bar{Y}P)^{-1}\bar{Y} = \bar{U} \quad \dots \dots (2)$$

\bar{V} も \bar{U} も \bar{A} と同じ形をとっている。 \bar{A} のかわりに A を使うと A と同じ形になる。

\bar{V} のゾーン毎の重みベクトル $(V) = (V^a, V^b, V^c)$, \bar{U} の重み $(U) = (U^a, U^b, U^c)$ がわかれば、重力モデル的エントロピー法で \bar{Y} を使って目的別遷移行列 P^a, P^b, P^c などを求めることができます。いま目的別総トリップ数 $(\bar{V}^a, \bar{V}^b, \bar{V}^c)$ は別に推計されたので、 $\bar{V} = (\bar{V}^a, \bar{V}^b, \bar{V}^c)$ とあらわせよ。 $(\bar{V}, \bar{V}^b, \bar{V}^c) = (\bar{A}^a, \bar{A}^b, \bar{A}^c)(I - Y)^{-1}$ 。ここで \bar{A} ノットトリップ生成数である。また $\bar{U} = (\bar{U}^a, \bar{U}^b, \bar{U}^c)$ とあらわせよ。

$$\text{さて (2) 式に (1) 式を代入すれば } \bar{U} = \bar{A} + \bar{V} Y \quad \dots \dots \dots \quad (3)$$

$$\text{これから } (\bar{U}^a, \bar{U}^b, \bar{U}^c) = (A^a, A^b, A^c) + (\bar{V}^a, \bar{V}^b, \bar{V}^c) Y \quad \dots \dots \dots \quad (4)$$

どうもが、全日における $\bar{U} = \bar{V}$ となるので、土地利用計画にもとづいて (V) が与えられれば (U) を求めることができる。

こうして求めた (U) と所率の (V) 、ゾーン間所要時間 Y 、トータル長分布の重力係数 α によってエントロピー法によって計算された(目的別に個々に計算) \bar{P} は、先に仮定した P とのような関係にあるか。 \bar{P} を P のように並べた行列を \bar{P} とおくと、エントロピー法の性質から

$$\bar{U} \bar{P} = \bar{V}$$

$$(3) \text{ 式を代入して } (\bar{A} + \bar{V} Y) \bar{P} = \bar{V}$$

$$(1) \text{ 式を代入して } \{\bar{A} + \bar{A} \bar{P} (I - Y \bar{P})^{-1} Y\} \bar{P} = \bar{A} \bar{P} (I - Y \bar{P})^{-1}$$

$$\bar{A} \{I + \bar{P} (I - Y \bar{P})^{-1} Y\} \bar{P} = \bar{A} \bar{P} (I - Y \bar{P})^{-1} \quad \dots \dots \dots \quad (5)$$

左辺の $\{\}$ の中は、 $I + \bar{P} Y + \bar{P} Y \bar{P} Y + \dots = (I - \bar{P} Y)^{-1}$ であるから、(5) 式は左から A^{-1} をかけ
 $(I - \bar{P} Y)^{-1} \bar{P} = \bar{P} (I - Y \bar{P})^{-1} \quad \dots \dots \dots \quad (6)$

右辺は $\bar{P} + \bar{P} Y \bar{P} + \bar{P} Y \bar{P} Y \bar{P} + \dots = (I - \bar{P} Y)^{-1} \bar{P}$ であるから、(6) 式は

$$(I - \bar{P} Y)^{-1} \bar{P} = (I - \bar{P} Y)^{-1} \bar{P} \quad \therefore \quad \bar{P} = \bar{P}$$

5. OD表の作成 (4) 式で求めた (U) を使って \bar{U} を作り、その目的別ベクトル $\bar{U}^a, \bar{U}^b, \bar{U}^c$ を次のように並べた行列 $\bar{U} = \begin{pmatrix} \bar{U}^a & \bar{U}^b & \bar{U}^c \end{pmatrix}$ を作り、 $\bar{U} \bar{P}$ を計算すれば目的別OD表がえられる。

ナットトリップ目的の目的が向であつたかは、ベースに利用できる自家用車があつたかどうかによって、全市全日の自動車利用率に影響をもつ。もしナットトリップ目的の目的によって更に目的別OD表を作りたいときには、(2) 式の \bar{A} を A にして \bar{U} を計算する。すなはち

$$U = A + A \bar{P} (I - Y \bar{P})^{-1} Y \quad \dots \dots \dots \quad (7)$$

この U は $\begin{matrix} n \\ \times \\ 3 \end{matrix} \begin{matrix} m \\ \times \\ 3 \end{matrix}$ のような形をしており、この U を $\bar{U} = \begin{pmatrix} \bar{U}^a & \bar{U}^b & \bar{U}^c \end{pmatrix}$ のような形に並べかえて $\bar{U} \bar{P}$ を計算すればえられる。

6. 帰宅のOD表

ベースへの帰途のOD確率は、ベースを出でからそれまでに通過して来たOD確率行列の積(順々に)と転置したものであらわせる。いまナットトリップ数について

$$(A^a) = \begin{pmatrix} A_1^a & & \\ & A_2^a & \\ & & \ddots \\ & & & A_m^a \end{pmatrix} \quad \text{などと並べ}$$

$$(A) = \begin{pmatrix} (A^a) & & \\ & (A^b) & \\ & & (A^c) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \diagdown & & & \\ & \diagdown & & \\ & & \diagdown & \\ & & & \diagdown \end{pmatrix}$$

を定義しておけば、

ナットトリップ目からの帰宅(後)は $\{(A) \bar{P}^* Y^*\}'$

ナットトリップ目からの帰宅(前)は $\{(A) \bar{P} Y \bar{P}^*\}'$

ナットトリップ目的の合計は $\{(A) \bar{P} (Y \bar{P})^{-1} R\}'$

$n \rightarrow \infty$ といふ時の合計は $\{(A) \bar{P} (I - Y \bar{P})^{-1} R\}' \quad \dots \dots \dots \quad (8)$

となる。これがそのまま帰宅トリップのOD表である。